

上海帰りのリル

1

船を見つめていた

ハマのキャバレーにいた

風の噂はリル

上海帰りのリル、リル：

…で始まる「上海帰りのリル」は敗戦後のわが国で流行った代表的歌謡の一つである。敗戦のペースたっぷりのムードで旋律は本格派。滑り出しが粋である。

まずユーチューブで三回はじっくり聴いて見てください。何に気づいたかな？

初回か二度目に気が付くのは、歌詞的には、切ない「港もの」だな、ということ。次に気づくのは、「時代もの」だろう。さらに気づくのは、至る所に変調の技法が盛り込まれ、微妙な音程の変化で主人公の動揺ぶりが窺える。もちろん現代もカラオケでよく謳われるが、変調

に次ぐ変調で祿に歌いきれる素人は少ない。

リルはキャバレー勤めの女性の源氏名であろうが、彼女には余程深い、思いきれない憂愁があったのだろう。

惚れ込んだ男の、恋心に憑りつかれてさまよう姿に、当時の、満州戦線や南方の戦地から帰国した男たちは共鳴できたのだろう。作詞家の目は鋭い。

ハマと言えば横浜のこと。ここまで戻って船乗り相手のキャバレー勤め？ いや上海も港町だからガーデンブリッジ近辺の高級キャバレーのことか？

色々に読めるから惹きこまれる。

何気ない最初の四行で、港視界の画面ショットから場所は頹廢的なシャンハイへ。

日中戦争の序曲とも言える上海事変当時、日本から中国に渡った女は多い。現地で遭遇する金持ちの将校か軍属か。それとも軍から甘い汁を吸う満州浪人か。諜報員を相手にした女を愛した男の戦後はまだ終わっていない。最初の四行だけで、この歌は夢やぶれし男どもの心を掻き立てる。ドラマ設定がきちんとできている。上手い。

気取らない、さり気ない描写だが、漂泊の「訳あり女」が忘れられない寂しい男。

もう戦争も終わり、世間は食うことで精いっぱい時代に、過去のカッコいい、帝国海軍陸戦隊上海駐屯旅団の憲兵を彷彿させる。経験者でなくとも、事情通の年配者なら、いや歴史好きの耽溺者なら、今の若者でもそこまで彷彿できるわけだから、当時は相当に日本中を沸かせた歌だった。

NHK「のど自慢」でもこの歌は人気で、毎回何人も挑戦したが、たいてい、曲の変調に乗り切れず、素人歌手は敗退した。歌詞のうま味は二番、三番と続くのにごすご敗退するわけである。

一番の後段はこう描写する。切ない想い出を旨に、語調は優しく続く。

甘い切ない思い出だけを

胸にたぐって探して歩く

リル、リル

どこにいるのかリル

だれかリルを知らないか

作詞者はこの男の甘い切ない思い出を「未練」といわず、「胸にたぐって探して歩く」と、映画のシーンなみに描写する。つまり、「未練」という観念的な用語を使わずに映像描写で書きつづる。歌手はリル、リル！ と絶叫気味で高音で歌うが、もちろん答えはないから、落胆した気持ちで声を落とし「どこにいるのかリル…」と独り言に変わり、聞く人にも落胆させて二番へつなぐ。

4

2

さて、二番になるとこの訳あり女性の事情がちらちら断片的に出て来る。そこがまた上手い。

黒いドレスを見た

泣いていたのを見た

もどれこの手にリル

上海帰りのリル、リル

黒いドレス姿で泣いているとなると、愛する人を亡くした、それが戦場に出ていた父か、それとも国許に遺して来た母か。兵隊に出た弟が戦死したか、はたまた主人公の知らない別の男がいて、そいつが上海駅頭あたりの銃撃戦で死んだのか…と、主人公は想像するはずだが、歌詞にはそこまでは書かない。

ただリルの身内に不幸があり、そのせいで喪服を着る姿で泣いている姿を見たという人がいた。主人公は何とかして慰めてやりたい気持ちだが、このうわさも風評でしかない。リルは上海から戻って来ているから国内で何か不幸があつたか？ それも定かでない。

状況がぼんやりしたまま、二番の後段に。いかにも上海らしい佇まいの描写が出る。

夢の四馬路すまろの霧降る中で

何もいわずに別れた瞳

リル、リル。ひとりさまようリル

誰かリルを知らないか

「四馬路」とは上海にある元は馬車道だった街路で、この辺りは上海一の歓楽街であった。アヘン窟も娼妓を抱える店も軒を連ねていた。日本軍がまだ勝ち戦で、海軍陸戦隊本部のビルも近いし日本人街ほんきゅも近い。だから夜ともなれば日中入り乱れての歓楽街となる。

リルはそんな将校を相手に客をとる高級娼婦だという説もあるが、この歌を愛する一般の日本人はそこまでは考えない。当時、日本では1930年代の大恐慌以来、倒産に継ぐ倒産で、転落した社長の家族の中には女学校を退学し大陸に渡った悲しい運命の子も珍しくない。歌詞というのは、如何様にも「想像」さえしてもらえればいい。

「霧降る」という描写も上海にはびったりで、作詞家がこの修辞を飾るだけの為に入れたわけではない。上海は

霧の街である。ドイツ・ミネの名曲「夜霧のブルース」の夜霧も上海夜霧である。だから夢の上海、男の上海なのである。

ここで二人は別れる、言葉少なに。目だけで見つめ合って。「別れた瞳」とは、今度、いつ、どこで会いましょう、などと約束できない。中国戦線は最後の最後まで日本軍の連戦連勝と報道されていた。だが実際には中国軍の戦略にまんまと嵌って、上海から南京へ。南京から南下して武漢三鎮へ。中部戦線でへとへとに疲れ果て、遂には重慶まで攻め込み、本土から渡洋攻撃までさせても挫けない中国軍の広大な大陸陽動作戦にかかって、関東軍と派遣軍はするする長期戦に持ち込まれて兵站不足で窮した挙句、総退却したのが実情である。

どうやら関東軍も派遣軍も兵站不足で敗退するぞという噂が仕切りに飛ぶ。上海帰りなら、この一連の消耗作戦とその途中途中で知り合った中国娘クーニャンとのかりそめの恋に酔いしれた想い出は数知れない。

状況は複雑だ、男女の色恋だけで通じる世界ではない。

だから、誰もが、ただ、見つめ合って、別れるほかなかった。この戦中の切迫状況は体験した者でないと理解できない。

同時代というより、やや遡る歌に、「蘇州夜曲」があるが、ここでも、この恋の幸せは泡沫うたかたのように消えろとしきりに言う。だから、余計切なく悲しい。歌の語調が見事に似合う。

3

三番の歌詞が抜群にいい。過去の状況は暗い運命。新日本に生きるには、二人で励まし合って…けなげである。

海を渡って来た

ひとりぼっちで来た

望み捨てるな、リル

上海帰りのリル、リル

暗い運命さだめはふたりでわけて

ともに暮らそう昔のまままで

リル、リル

きょうも会えないリル

誰かリルを知らないか

お気づきか？ セリフで万人の心をふるえさせる部分は「暗い運命は二人でわけて ともに暮らそう昔のまま」である。とかく男の方がロマンチックで女はこんな発想はしない、過去は過去、今は今。

江戸小唄から女の割り切りとはそういうもの、と言われる。が、この、上海帰りのリルは、まさに男の未練がましい心情を上手く捉えている。

さて、ここらあたりでもういっぺん、ユーチューブに戻って、最初から聴いてみてください。

この暗い運命を二人で分け合って普通に暮らそうよという主人公の切ない期待とはうらはらに、もはや日本中が焼け野原で。アメリカン進駐軍がジープに乗って、

ハロー！ アーユーハングリー

ギブミーチョコレートと浮浪児が垢だらけの手を出す。
この歌が出た昭和二五年はまだサンフランで持たれた
日米講和条約の締結二年前である。まだアメリカの占領
国家だったから、亡国以前の強国回帰願望が潜在する。
その一方でシベリヤ抑留からの帰国者が共産主義で洗脳
されて、日本国は思想混在。折しも北朝鮮が38度線を
突破して朝鮮戦争へ。我が国では再度「軍艦マーチ」を
復活させて、再軍備論争…。

当時、万人の心を捉えたこの歌はまだ亜細亜の覇者た
る同朋の戦場を蘇らせずにはおかない。「上海帰りのリル」¹⁰
は失恋の恋歌だが、時代精神を巧みに捉えて、切ない男
の古き良き時代復活の願望と結びついて敗北感と緬い交
ぜに人心を引き寄せずにはおかなかった。

その作詞者の気持ちは素直に万人の心に結びついた。

若者よ、これから作詞家になりたい人は、何気ない言
葉で人心を掴むことを忘れなさんな。駕鳴り立てるより、
心にじわじわと纏まといつく歌を書きなさい。(濱野成秋)